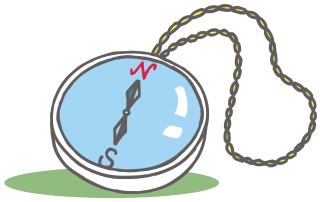
大阪市立住吉中学校　校長室だより　～夢をきり拓く子どもたちのために～

羅　針　盤



第 **12** 号　　令和３年（２０２１年）７月５日（月）

◆ ６月２３日「沖縄全戦没者追悼式」より

沖縄戦から７６年の月日が経過し、最後の激戦地となった沖縄県糸満市の摩文仁（まぶに）にある平和記念公園では、太平洋戦争末期の沖縄戦での犠牲者を悼（いた）む「慰霊の日」（６月２３日）に「沖縄全戦没者追悼式」が営まれました。新型コロナウイルスの感染対策として、去年よりもさらに規模を縮小しての開催となりました。今年は『緊急事態宣言』が出されていることにより、県外からの来賓や一般の県民の参列は見送られ、参列された方は去年よりもさらに少ない３６人での実施（例年は約５０００人の方が参列されています）となりました。式典では、児童生徒を代表して、宮古島市の中学校２年生の上原美香（うえはらみか）さんによる平和の詩「みるく世（ゆ）の謳（うた）」が朗読されました。（全文を掲載します。）上原さんはめいが生まれて初めて命の芽吹きを目にして感じた平和への思いと、多くの命が犠牲となった７６年前の戦争の悲惨さを対象的に描き、平和な世の中をつくっていきたいという思いを込めて、自作の詩を読みあげられたそうです。

「戦争の過ちを伝え続け、今を生きる私たちが平和な世界をつくっていく」という彼女の願いが込められた、この詩のタイトルとなっている「みるく世」は沖縄の言葉で「平和な世の中」を意味しているそうです。朗読した後に彼女が語った、「耳をふさぎ、目をそむけたくなっても、まずできることは事実に向き合うことだ」という言葉は、ともに平和をつくりあげていく私たちへのメッセージと受け取るべきではないかと思います。

「みるく世の謳」

12 歳。
初めて命の芽吹きを見た。
生まれたばかりの姪は　小さな胸を上下させ
手足を一生懸命に動かし　瞳に湖を閉じ込めて
「おなかすいたよ」　「オムツを替えて」　と
力一杯、声の限りに訴える
大きな泣き声を　そっと抱き寄せられる今日は
平和だと思う。
赤ちゃんの泣き声を　愛おしく思える今日は
穏やかであると思う。
その可愛らしい重みを胸に抱き
６月の蒼天（そうてん）を仰いだ時
一面の青を分断するセスナにのって
私の思いは　76 年の時を超えていく
この空はきっと覚えている
母の子守唄が　空襲警報に消された出来事を
灯されたばかりの命が　消されていく瞬間を
吹き抜けるこの風は覚えている
うちなーぐちを取り上げられた沖縄を
自らに混じった　鉄の匂いを
踏みしめるこの土は覚えている
まだ幼さの残る手に
銃を握らされた少年がいた事を
おかえりを聞くことなく散った
父の最後の叫びを
私は知っている
礎（いしじ）を撫でる皺（しわ）の手が
何度も拭（ぬぐ）ってきた涙
あなたは知っている
あれは現実だったこと
煌（きら）びやかなサンゴ礁の底に
深く沈められつつある　悲しみが存在することを
凛（りん）と立つガジュマルが言う
忘れるな、本当にあったのだ
暗くしめった壕（ごう）の中が
憎しみで満たされた日が　本当にあったのだ
漆黒（しっこく）の空
屍（しかばね）を避けて逃げた日が　本当にあったのだ
血色の海　いくつもの生きるべき命の
大きな鼓動が　岩を打つ波にかき消され
万歳と投げ打たれた日が　本当にあったのだと
６月を彩る月桃（げっとう）が揺蕩（たゆた）う
忘れないで　犠牲になっていい命など
あって良かったはずがない事を
忘れないで　壊すのは、簡単だという事を
もろく、危うく、　だからこそ守るべきこの暮らしを
忘れないで　誰もが平和を祈っていた事を
どうか忘れないで　生きることの喜び
あなたは生かされているのよと
いま摩文仁（まぶに）の丘に立ち　私は歌いたい
澄んだ酸素を肺いっぱいにとりこみ　今日生きている
喜びを　震える声帯に感じて　決意の声高らかに
みるく世（ゆ）ぬなうらば世や直（なう）れ
平和な世界は私たちがつくるのだ
共に立つあなたに　感じて欲しい
滾（たぎ）る血潮に流れる先人の想い
共に立つあなたと　歌いたい
蒼穹（そうきゅう）へ響く癒しの歌
そよぐ島風にのせて　歌いたい
平和な未来へ届く魂の歌
私たちは　忘れないこと
あの日の出来事を　伝え続けること
繰り返さないこと
命の限り　生きること
決意の歌を　歌いたい
いま摩文仁（まぶに）の丘に立ち
あの真太陽（までぃだ）まで届けと祈る
みるく世（ゆ）ぬなうらば世や直（なう）れ
平和な世がやってくる
この世はきっと良くなっていくと
繋（つな）がれ続けてきたバトン
素晴らしい未来へと
信じ　手渡されたバトン
生きとし生ける　すべての尊い命のバトン
今、私たちの中にある
暗黒の過去を溶かすことなく
あの過ちに　再び身を投じることなく
繋（つな）ぎ続けたい
みるく世を創るのはここにいるわたし達だ